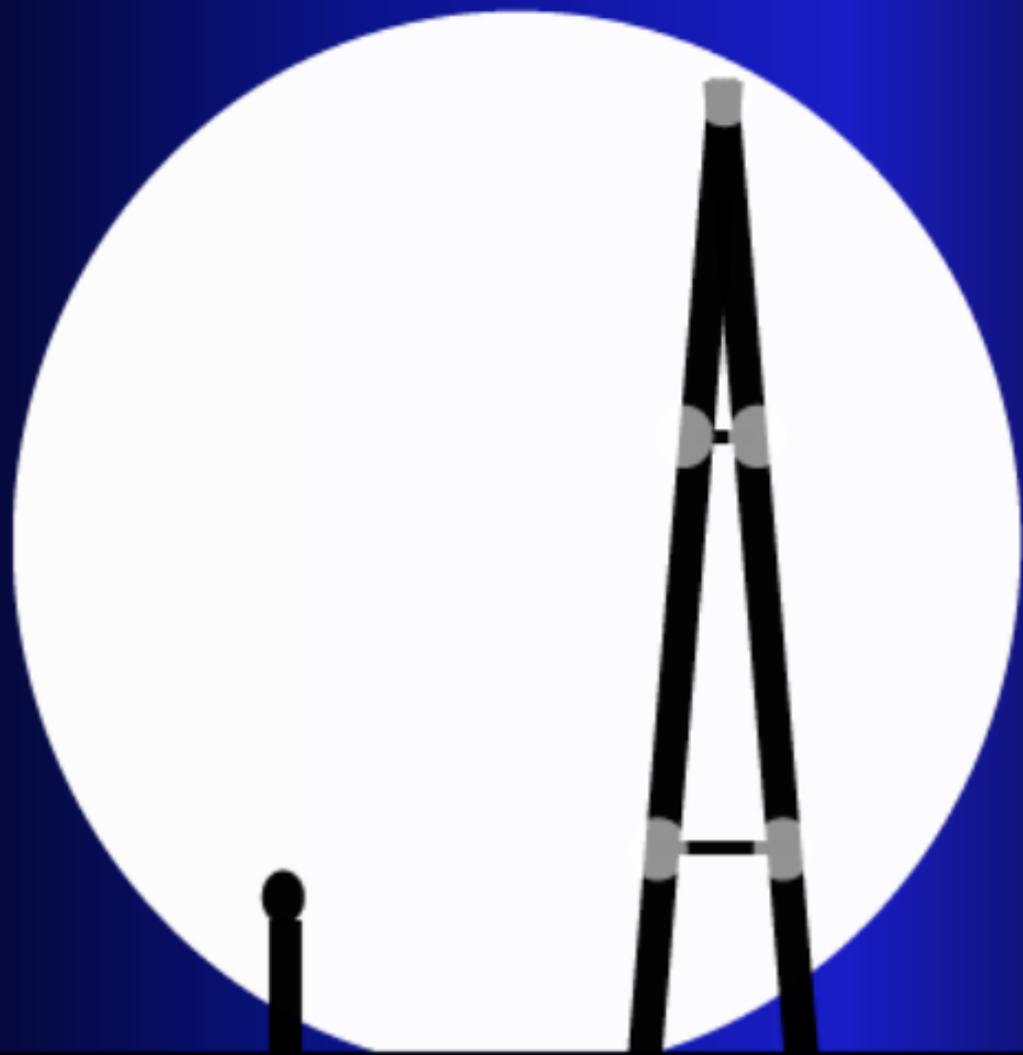


【純文学ゲーム・ブック】
月を見上げては



弦楽器イルカ



想像してほしい。

あなたは今、喫茶店にいる。ドアの脇に掛けてある小さな木の看板と壁を這うツタが目印の、年季の入った喫茶店。窓際の席に座り、テーブルの上にはコーヒーカップが一つ。隣の席にはカップルが座っている。窓の外を眺めると、たくさんの人が行き交っており、何気なくその中の一人、髪が薄いサラリーマン風の中年男に目がいく。ポケットから携帯電話を取り出した瞬間、黒い財布のような物を地面に落とす。男は携帯の画面に気を取られ、気付かないまま歩き去ろうとする。

[あなたは、席を立ち、財布を拾おうと外へ出る。⇒2ページへ](#)

[あなたは、そのまま、コーヒーカップに手を伸ばす。⇒20ページへ](#)

あなたは、席を立ち、財布を拾おうと外へ出る。

喫茶店のマスターにちょっと急いで勘定を払い、カランと音のするドアを開ける。もしかしたら誰かに拾われてしまうかと思ったが、同じ場所にそれは落ちている。近づいてみると、黒い小さな小銭入れだ。

あなたは、拾うのをやめ、適当に歩き出す。⇒45ページへ

あなたは、それを拾い上げ、男の過ぎ去った方を見やる。⇒35ページへ

あなたは財布をポケットに入れ、足早にその場を離れる。身の危険を感じる。何かが起きている。ふと、財布の中身を見ていないことに気付く。一瞬ためらい、しかし意を決して開くと小銭はなく、ジップロックに入った「石」が出てくる。灰褐色のごつごつした、何の変哲もない小さな石。

[あなたは、財布を交番へ届ける。⇒92ページへ](#)

[あなたは、財布を持って喫茶店に戻る。⇒184ページへ](#)

誰かを待とうと思ったから？

人生には、今この瞬間にも何か事件が起こっているかもしれない。だが何も起こっていないように見えるとしたら、それに気付かず見過ごしてしまっているだけかもしれない。あなたは誰かを待っている。その誰かが持っていた財布は、さいふ＝312という数字を持っていることに気づく。そして財布の中に入っていた物、それも同じように数字を持っているはずだ。

あなたは、それが持っている数字に気付き、そのページへ進む。

あなたは、それを見過ごしてしまう。⇒64ページへ

あなたは、「あの石はいったいなんですか？」男に尋ねる。

男は、一瞬困ったような顔で辺りを確認するが、ちょうど建物の蔭に隠れるようなスペースがあり、まずそこへあなたを導く。「あれは月の石だ」「月？」「そう。地球上には存在しない物質が含まれている。これ以上詳しく話せないが、あの石でとんでもないことが起こる。だから私は人知れず処分することにした。それで、石はどこにある？」

あなたは、財布を取り出す。⇒66 ページへ

あなたは、「警察に届けた」と言う。⇒96 ページへ

男がもう一度、財布を落としたこの場所に現れるのではないか、あなたは期待をしている。そしてその期待にこたえるように、10分後、男が現れる。あなたはすぐに店を出て、男に近づく。「あの……」男が振り向く。気づいたような表情。先ほど声をかけた自分のことを、どうやら覚えているようだ。

あなたは、「これ、落としましたよ」財布を出す。⇒82ページへ

あなたは、「あの石はいったいなんですか？」男に尋ねる。⇒11ページへ

あなたは、追いかける。

女性の後を追って角を曲がるが、ちょうどその大通りで開催されていた地産地消フェアの活気ある人ごみのせいで、女性をあっさり見失ってしまう。仕方なく沿道に立ち、ふと、手に持っている財布の中身を見ていないことに気付く。一瞬ためらい、しかし意を決してファスナーを開くと、二つ折りの中央に、紙に包まれた長細い物が挟まれている。包みを開けると、刃渡り10センチ以上の「ナイフ」が出てくる。

あなたは、財布を交番へ届ける。⇒92ページへ

あなたは、財布を持って喫茶店に戻る。⇒184ページへ

あなたは、そのまま、コーヒーカップに手を伸ばす。

すると、「バカにすんな！」と女性の怒鳴り声が聞こえる。見ると、隣の女性がうつむいて拳を握り締め、男は無表情に席を立とうとしている。

あなたは、事の成行きをじっと見つめる。⇒43ページへ

あなたは、もう一度、コーヒーカップに手を伸ばす。⇒7121ページへ

あなたは、席に戻る。

あなたは、そのまま、コーヒーカップに手を伸ばす。コーヒーは空になり、あなたは席を立つ。マスターに勘定を払い、外へ出てしばらく大通りを歩く。

49ページに進んでください。その文章を一通り読んだ後、エピローグへ進んでください。49ページには次の指示はありません。

あなたは、財布を渡そうと、男に近づく。

「あ、あの」中年のくたびれた男が、こちらを訝しげに見る。だが次の瞬間、男は大きく目を見開き唇を震わせる。そしてあなたに背を向け走り出す。先の角を曲がり消える。問いかけも追いかけるタイミングも失い、あなたは立ち尽くす。

49 ページへ進んでください。そのページの文章中に算用数字が一つだけ出てきます。それが暗号です。文章を一通り読んだ後、その算用数字のページへ進んでください。

あなたは、それを拾い上げ、男の過ぎ去った方を見やる。
すると、しばらく先のところで男は突っ立ったまま、携帯の画面を食い入るように見ている。

あなたは、財布を渡そうと、男に近づく。⇒24 ページへ

あなたは、財布をポケットに入れ、男と反対方向へ向かおうとする。⇒50 ページへ

あなたは、事の成行きをじっと見つめる。

男が一万円札をテーブルに置き、「今まで付き合えて楽しかったよ。それじゃ」と言って立ち去る。女性は両肘をついたままずっとテーブルを見つめている。やがてあなたの視線に気づき、キッと睨みつける。「なによ！」そう言ってバッグを掴み、足早に立ち去る。ふとその席を見ると、ピンク色の大きな財布が床に落ちていることに気づく。

あなたは、席を立ち、財布を拾おうとする。⇒77ページへ

あなたは、もう一度、コーヒーカップに手を伸ばす。⇒7121ページへ

あなたは、拾うのをやめ、適当に歩き出す。

49 ページに進んでください。その文章を一通り読んだ後、エピローグへ進んでください。49 ページには次の指示はありません。

するとあなたの脇を3人の男たちが走り抜ける。私服の男たちは素早い駆け足で音もなく角を曲がっていく。通行人も数人がちらっと見るが彼らがあまりに自然なため誰も気にとめない。あなたを除いては。不意に思う。人生は、それを経験しなければ気付かないことの連続でできている。通り過ぎる事柄に、意味を見出す者とそうでない者がいるように。

あなたは気付いているのだろうか？

あなたは、財布をポケットに入れ、男と反対方向へ向かおうとする。

49ページに進んでください。その文章を一通り読んだ後、エピローグへ進んでください。49ページには次の指示はありません。

あなたは、それを見過ごしてしまう。

あなたは、そのまま、コーヒーカップに手を伸ばす。コーヒーは空になり、あなたは席を立つ。マスターに勘定を払い、外へ出てしばらく大通りを歩く。

[エピローグへ進んでください。](#)

あなたは、財布を取り出す。

男は「ありがとう」と言ってそれを受け取る。そして中味を確認すると、最後にあなたに言う。

「感謝する。これさえ処分すれば、少なくともしばらくはあのウイルスの存在を恐れなくて済む」

「ウイルス？」

「知らないほうがいいこともある」

それだけ言うと男はあなたに背を向け走り出す。あなたはその背中を見送る。男が角を曲がって消える。

あの男は信じてはいけない男だったのかもしれない、と思う。もしかしたら今もどこかの実験室では、月の石からウイルスの培養が行われているのかもしれない。あなたを私服の男たちが取り囲み、すると目の前のマンホールの蓋が突然開いて、「さあ、こっちよ」と女の子とビーグル犬が手招きする、そんな逃走劇が始まるかもしれない。

あなたは辺りを見渡すが、だがやはり誰かに追われている気はしない。あなたの存在には、誰も注意を払っていないようだ。それが現実か。だがそうだ、家に帰ったら今度はそんな物語を書いてみようと思う。

少女とビーグル犬に連れられて地下水路を逃げる主人公は、長い髭の老人が組織する秘密結社の助けを借りて、ウイルス兵器で世界に脅威をもたらそうとする一味と対決する。遠い昔、月と地球に降り注いだ隕石に含まれていたタンパク質が、地球では生物となり、月面では地球の生物を脅かす存在に変容していた事実が判明する。舞台はやがて地球を離れ月へ、人類初の月面カーチェイスが繰り広げられる。月の裏側にある一味の採掘拠点を、モービルごと突っ込んで爆破した主人公は一命を取りとめるも、地球へ生還するロケットに辿り着く手段をなくし、なんとか青い地球を眺められる場所までは歩き着くも、そこで死を覚悟する。そこへ、爆発の震源地を頼りに駆け付けた少女とビーグル犬が乗る、もう一台のモービルが到着する。

「早く乗って！」

「よくここがわかったね。でも君には助けってもらってばかりだ」

「君じゃなくてルナだって言ってるでしょ、レディを子供扱いしないで。それにお礼なら生還してから、あなたを見つけたこのコにね。言ったでしょ、ムウの鼻は地球一、いえ、宇宙一ってね」

「ワン！」

[エピローグへ進んでください。](#)

あなたは、席を立ち、財布を拾おうとする。

普通のサイズより二まわりは大きい。全体を一周するファスナーが付いていて、たぶんいろいろな物が入るのだろう。

あなたは、それを拾い上げ、女性の後を追う。⇒100ページへ

あなたは、席に戻る。⇒23ページへ

「…はい。まあ」

「ですよ、やっぱり。すみません、付き合わせちゃって。本当はいいって言われたら友達になって下さいって言うつもりだったんですけど。あの、お願いばかりで申し訳ないんですけど、あたしに音楽薦めてくれませんか？あたし普通のメジャーどころしか聞いたことなく、クラシックとかはあんまアレなんですけど、でもトオルさんが薦めるなら聞いてみます。今のあたしが聴いてリラックスするような音楽ってありますか？」

あなたは、しばらく考えてから答える。

「仕事を抜きにして、趣味で聴く音楽でよければ、ちょうどいいのがありますよ。『月とナイフ』。題名もぴったりですけど、歌詞も恋愛の終わりを歌っていて、次へ踏み出す勇気ももらえそうな気がします。ちょっと古い曲ですが」

「ありがとうございます。探してみます」

そう言うと彼女は去って行った。その後ろ姿を見ながら僕は、さっきついた嘘のことを考えていた。今のところ僕に彼女はいい。だからこそ、もしかしたら彼女の隣を今も歩いているかもしれない、もう一人の僕について思いが巡るのだった。

[エピローグへ進んでください。](#)

あなたは、「これ、落としましたよ」財布を出す。

男は疑うようにあなたを見た後、さっと財布をひったくると物も言わずに踵を返して立ち去る。後には、胸の高さに掲げていた腕と、あなた一人が残される。

[エピローグへ進んでください。](#)

あなたは、財布を交番へ届ける。
簡単な調書を書き、手続きを済ますと、もう他にすることはなくなってしまった。

[エピローグへ進んでください。](#)

あなたは、「警察に届けた」と言う。

「チッ」と舌打ちして、男は走り去る。あなたはしばらく男の後ろ姿を見送っているが、これからどうなるのだろうと思う。あの男たちに追われるのだろうか。周りにはそれらしき人影はない。しかし、あなたがこの石を使って男の言うようなとんでもないことを起こせる気もしない。あなたにとってこれはただの石だ。

[エピローグへ進んでください。](#)

あなたは、それを拾い上げ、女性の後を追う。

喫茶店のマスターにちょっと急いで勘定を払い、カランと音のするドアを開ける。急ぎ足で通りの真ん中へ出て、女性が過ぎ去った方を見やる。

49ページへ進んでください。そのページに5行の文章と、「あなたは気付いているのだろうか？」という一文が書かれています。そこで行の一番最後の5文字を縦に読んでください。いし=14のように数字の意味を持つ暗号になっています。文章を一通り読んだ後、暗号の指示するページへ進んでください。

「いえ、いませんけど」

「え、ホントですか！いえ、その、こんなすぐこんなこと言うのあれなんですけど、あの、お友達になってもらえませんか？」

「いいですよ」

「ありがとうございます」

僕は彼女に付き合っただけで駅まで見送る間、電話番号とメールアドレスを交換した。そこで誰かに見られている気がしてふっと振り返ったが、特に誰も見ている者はいなかった。

[エピローグへ進んでください。](#)

あなたは、財布を持って喫茶店に戻る。

先ほどと同じ窓際の席に座り直す。窓の外は相変わらずの風景で、ふと思う。あなたはなぜ喫茶店に戻ったのだろう。

[なんとなく選択肢があったから？⇒1092ページへ](#)

[誰かを待とうと思ったから？⇒5ページへ](#)

女性がもう一度、財布を忘れたこの場所に現れるのではないか、あなたは期待をしている。そしてその期待にこたえるように、10分後、女性が喫茶店に現れ、カウンターにいるマスターへ何事か話しかける。あなたはすぐに席を立ち、女性に近づく。「あの……」女性が振り向く。気づいたような表情。隣に座っていた自分のことを、どうやら覚えていたようだ。

あなたは、「これ、落としましたよ」財布を出す。⇒11111ページへ

「どうしてあんな物が入っているのですか？」女性に尋ねる。⇒22222ページへ

なんとなく選択肢があったから？

特に理由もなく入った喫茶店で飲む2杯目のコーヒーに、あなたは胃を重くする。途中で口をつける気をなくし、ぼんやりと窓の外を眺める。なんとなく、ここで誰かを待っていた気がする。そんな感慨を抱きながら、特に何も起きぬまま店を出た。

[エピローグへ進んでください。](#)

おまけページ

このゲームブックでは、誰も「ヨロシク」とは言いません。

そこんところ、ヨロシク。

あなたは、もう一度、コーヒーカップに手を伸ばす。

コーヒーは空になり、あなたは席を立つ。マスターに勘定を払い、外へ出てしばらく大通りを歩く。

49ページに進んでください。その文章を一通り読んだ後、エピローグへ進んでください。49ページには次の指示はありません。

あなたは、「これ、落としましたよ」財布を出す。

女性は驚いた顔であなたを見た後、「ごめんなさい。ありがとう」と言って財布を受け取る。

「あの、さっきはごめんなさい。あたし怒鳴りましたよね、あなたに」

「いえ」

「でも、警察とかに届けてくれてもよかったのに、財布」

「いや、でもあの、中身」

「え？」

「失礼ですけど、何か連絡先わかるかと思って見たら、中味、アレだったので」

「……あ！すみません」

彼女は自分が入っていたナイフの存在を思い出したようだ。刃渡り10センチ以上のナイフは、人に知ればいろいろと物議を醸す恐れがある。

「え、それでここに残っててくれたんですか？」

「いや、マスターに預けようかとも思ったんですが、まあ、暇だったので」

「ありがとうございます。あの、お礼に何か奢らせてください」

「いや、それは」

「お願いします。それにできれば、誰かと話して少し落ち着きたいんです」

あなたは返答に困る。

「…変なお願いですよ。すみません」

あなたの心にさっきのパンチが思い出される。

「まあ、暇なんでいいですよ。でもいいパンチでしたね」

「え？」

彼女はびっくりして逆に返答につまったようだ。

「見てたんですか？」

「清々しかったですよ。見ず知らずの僕が言うのもなんですが。男が寄ってたかって女性一人を羽交い絞めにするのはどうかと思いましたし」

「いえ。あたしが悪いんです。短気で。昔からよく言われるんですけど。本当に情けない。あの男もひどいヤツだったけど、でも付き合ったのはあたしの責任だし。あ、よかったら場所変えませんか？もうコーヒーはこれ以上飲めないし。…あ、マスター、このコーヒーはもちろん美味しいですよ。また来ますからね」

彼女に少し気おされて、すぐ近くのオイスター・バーへ寄ることにした。だが僕も彼女もアルコールは頼まなかった。僕は初対面ということもあるが、彼女は「この勢いで飲むとひどいことになりそうで」と笑い、ノンアルコール・ビールで彼女の失恋を乾杯した。早口な彼女の身の上話をまとめると、あの人は高校生の頃から付き合っていた初めての男だと言った。

「はじめは淡い恋愛で、でもだんだんお互いの本性がぶつかってしまって。もう10年以上付き合ってるしやっぱ結婚って思ってたけど、今考えれば何で？ですよ、ホントに。今日も本当は、別れてやるからあたしの時間返せ、って言いたくて」

僕は財布に入っていたナイフを思い出して沈黙する。彼女は口を開け言葉を探すが、僕の表情を見てしばらく黙った後、次の言葉を飲み込む。そして、口調をゆっくりと改めて話します。

「いえ、違いますね。嘘ですね、今の。本当は別れたいとは思ってなくて。ナイフなんて、今思えばバカみたいだけど、でも本気でした。はっきりどうするか決めてたわけじゃないけど、あたしと別れるなら死んでとか、逆にあたしを殺してとか、いろんな想像が膨らんで。バカですね、ホントに」

僕は黙っている。

「あたし、何言ってんだろ、ホントごめんなさい」

彼女は目に涙を浮かべているような気がする。

「大丈夫？」

「ええ、もちろん。全然、何でもないです」

彼女が焦ったように話題を変えた。

「あ、そういえば自己紹介とか全然まだでしたね。あたし、月子っていいです。変わりますよね。今は文房具の営業してます」

「そうですか。僕はトオルです。どこにでもある名前だから、石投げたら『痛い。どこ投げてんだ』って怒ると思います」

自己紹介によく使うネタだったが、割と受けてくれた。

「今は、音楽療法士をしています」

「へえ、珍しいですね。それ、どんな仕事ですか」

僕は簡単に仕事の内容を紹介した。

「まあつまり、まとめると音楽で人を癒すっていう。面倒だからそれだけ言うことも多いです」

「素敵な仕事だと思います。ホント」

それからお互いの仕事についてしばらく話した後、話題もなくなり店を出た。「どうしても」と言ってきかない彼女が勘定をすませたが、彼女と僕とはそこから反対方向だった。別れ際、彼女が僕に言った。

「本当にありがとうございました。あの、最後に、一つお願いしてもいいですか？」

「え？」

「トオルさん、彼女いらっしゃいますよね？」

「…はい。まあ」⇒81ページへ

「いえ、いませんけど」⇒110ページへ

「どうしてあんな物が入っているのですか？」女性に尋ねる。
女性は驚いた顔であなたを見た後、さっと財布をひったくると物も言わずに踵を返して立ち去る。後には、ドアに付けられた鈴のカランという乾いた音と、あなた一人が残される。

[エピローグへ進んでください。](#)

何事かと思い、男たちの後を追って角を曲がると、先ほどの女性が彼氏に掴みかかっている。それを走って来た男たちが止めにかかる。「もうやめろよ」「なに友達呼んでんのよ！」「お前がめちゃくちゃだからだよ！」などと怒号が飛び交う。数人がもみくちゃになるなか、見ると女性が羽交い絞めにされている。そこで観念したように「もう離して」か細い声で女性が言い、その声の弱々しさに男が手を離れた次の瞬間、振り上げた拳が彼氏の顔面を見事にとらえる。鈍い音と共に、「彼氏」に「元」という肩書が殴りつけられ、呆気にとられていると女性は騒ぎを置き去りに、さっさと歩き去って行く。

[あなたは、追いかける。⇒16ページへ](#)

[あなたは、財布を交番へ届ける。⇒92ページへ](#)

あなたはその後、特に目的もなく街を歩き、仕方なく家路に着く。

見上げると、暮れ始めた空に月がかかっている。大きくて、遠い月だ。この月をいろんな気持ちで見上げるのかもしれない。もう一人の、あるいは何千人の、あり得たかもしれない別のあなたが。

【純文学ゲーム・ブック】月を見上げては
<http://p.booklog.jp/book/21852>

著者：弦楽器イルカ

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/21852>

ブックログのパブー本棚へ入れる
<http://booklog.jp/puboo/book/21852>